

(ii) 年度別総会・研究発表分野別数および会員数

年度	食物	被服	住居	経営	合計	会員数
1988	14	8	1	5	28	526
1989	13	4	1	5	23	518
1990	13	4		4	21	542
1991	15	4	4	5	28	552
1992	12	9	1	9	31	534
1993	21	9	4	4	38	549
1994	17	7	3	4	31	543
1995	13	10	2	5	30	547
1996	14	13	2	6	33	541
1997	17	8	2	5	32	523

2. 展 望

最近、支部総会について、懇親会を催すこと、研究

発表では、研究発表時間の延長、共同研究発表者の会員資格を緩やかにすること、研究発表要旨への記載についての自由度を高めたこと、ポスターセッションの採用など幾つかの改革が行われた。

また、研究会についても、かつては学会の内部あるいは外部から著名な学者などを講師として招き講演会を開くのが常であったが、最近では家政学に関するシンポジウムやフォーラムが主になってきている。これは会員のなかにある家政学が今のままで良いのか、との危機意識を反映していると見る事が出来る。

ともあれ、支部総会、研究会について行われた改革は、今後は一つには、研究環境あるいは研究体制のあり方、二つには、研究成果の社会への還元などの方向へ進んでいくものと予想される。

関 西 支 部

関西支部長 西 村 一 朗

1. はじめに

筆者に与えられた課題は1988年から1997年までの関西支部の活動を概観し回顧と展望を行うことである。この10年間は支部長で言えば、遠藤金次先生（現在、関西女子短大教授）の2期4年、梁瀬度子先生（現在、武庫川女子大学教授）の2期4年、そして西村一郎（奈良女子大学）が担当した1期2年に当たる。本稿では、一応その3期に分けて述べていきたい。

2. 1988～1992年

この期の特徴の一つは、春の総会の時に家政学関連の専門家等に講演をしていただくことを始めたことではなかろうか。総会への多くの参加を促す意味もあると言える。現在まで主に開催校のお世話で講師等を選んで頂いている。今まで専門も出来るだけ順次偏らないように考えてきてはいるが、必ずしもうまくいっているとは言えない。秋は研究発表会を行うことにしているが、その際にフォーラムを開催したこともあった。

もう一つの特徴は、運営上のことで、支部長の選出方法を変えたことである。決してそんなことはないのだが、「支部長が密室で選ばれているのではないか」との支部会員の声がかえってきたので、より民主的に一歩改革を行ったのである。その手続きは、支部長指名の各府県から各1名の計7名の「支部長推薦委員会」

が、まず3名の支部長候補を投票により選ぶ。次に支部役員会において、その3名のうち2名に絞る投票をする。そして、その候補2名について支部役員全員による郵送投票で候補1名に絞り、次の支部総会で承認を得るということになっている。このやり方によって、その後4期にわたって支部長は選ばれた。

3. 1992～1996年

この期の梁瀬度子支部長は、前に述べた新しい選出方法で選ばれた。この期の特徴は、1995年1月17日未明に「阪神・淡路大震災」が起こったことである。この年には、また、関西支部が担当して奈良女子大学で「日本家政学会第47回大会」が開催された。そのために1995年春（5月）の関西支部総会は支部役員交替の時にあたっていなかったこともあり延期された。

「阪神・淡路大震災」が正に関西支部域で起こったことでもあり、支部長は、当該地域の大学、短大等の家政学会員のいる職場に電話する等して「お見舞い」を行った。併せて支部有志会員の要望を受けて支部長は本部に対して震災に関連して主に生活面の問題点と課題を追求するための調査研究を行う「特別委員会」を設置するように要請を行った。その結果、理事会で原案を作って貰い、5月の総会で認められて正式に「阪神・淡路大震災調査研究特別委員会」として発足

学会活動の回顧と展望

することになった。委員長に関西支部出身の副会長の丹羽雅子先生が就任された。当然、関西支部の会員が委員の多くに選ばれたが、本部ないし関東支部からも数名参加して頂いた。これは以後3年間行われることとなり、1998年3月をもって報告書を提出して一応終結することになっている。

この期のもう一つ大きなイベントは関西支部で第47回大会が1995年5月に行われたことである。会場が奈良女子大学であったので、奈良女子大学で実行委員会をつくって頂いた。本部から運営委員長に丹羽副会長、現地の実行委員長に関西支部長の梁瀬度子先生（当時、奈良女子大学）があたられた。20日、21日にわたって開催され、特別講演会には宇宙飛行士の向井千秋さんを講師に迎え市民にも公開して盛況だった。研究発表会にも1,500人余の参加があった。

4. 1996～1997年

この期の支部長の西村一郎（奈良女子大）も前期と同じ選出方法で選ばれた。この期の新しいことは、前期から若干話の出ていた「企画小委員会」を実際に立ち上げたことである。これは全国の理事会等でも議論されていることであるが、家政学会の会員がじり貧状況にあること、平均年齢がじりじり上がっていること

等の問題点を関西支部ではどう受け止めるかを組織的に考えてみようとの一つの試みである。会員の多い府県から二人、そうでないところから一人の委員が出て予算も付けて調査研究活動をしている。1998年の3月にはまとまる予定であるが、二つの調査をしている。一つは、企業や行政に対して、家政学会への要望、家政学のイメージ、役割等を聞いている。もう一つは「若手」会員への調査で、家政学会を活性化するための意見等を聞いている。

5. おわりに—今後の展望—

以上述べてきたことから今後の展望の一端を述べてみると、「企画小委員会」での調査結果を踏まえて、第一に対社会的活動を強めること、例えばシンポジウム、共同研究等を行うことであるが、そのためには支部財政を自主的にどう強くするかも併せて考えておく必要があるだろう。第二に、「若手」の意見も十分反映するように、役員の選挙の方法の改善も含めて考えていかなければなるまい。

以上述べたこと、および表1の「一覧」作成にあたって遠藤・元支部長、梁瀬・前支部長、そして各担当校の諸先生に問い合わせを行って、より完全になったと思っている。しかし、まだ不十分としたら筆者の責任である。

表1. この10年間の総会・講演会、研究発表会の期日と担当校、講演の演者、演題一覧

期 日	担当校・演者・演題	期 日	担当校・演者・演題
1988. 5. 7	大阪市立大 総会 講演 1. 永山升三「生活環境と洗剤」 2. 玉井義弘「都市と水環境」		の変容」 2. 岩井和夫「機能性食品のこと」
1988.10.22	和歌山大 研究発表会	1990.11.17	大阪女子学園短大 研究発表会
1989. 5. 13	奈良教育大 総会 講演 1. 住田昌二「変動する暮らしを考える」 2. 森 幹郎「高齢者の生活を考える」	1991. 4. 27	園田学園女子短大 総会 講演 1. 吉田集而「ニューギニアの食事と衣服」 2. 中川八郎「生物時計の意義を探る」
1989.10.14	神戸大 研究発表会 フォーラム「家政学設置基準の見直し」について	1991.10.26	奈良女子大 研究発表会 役員会（支部長選挙）
1990. 5. 12	京都府立大 総会 講演 1. 広原盛明「高齢化社会における家族・ライフスタイル	1992. 5. 9	大阪成蹊女子短大 総会 講演 1. 竹村陽子「アートとデザインと建築を結ぶ」 2. 中田陽造「アルコール依存症による社会生活障害」

1992. 10. 24	京都女子大 研究発表会	1995. 10. 21	京都府立大 研究発表会
1993. 5. 8	奈良佐保女学院短大(ならまちセンター) 総会 シンポジウム「豊かな暮らしと生活 環境—ニューコンセプトを探る」	1996. 5. 11	大阪樟蔭女子大 総会 講演 1. 岸本幸臣「人権としての住 まい」 2. 松原藤好「工業的（無菌） 蚕飼育法」
1993. 10. 23	神戸女子大 研究発表会 フォーラム「環境問題」 役員会（支部長選挙）	1996. 10. 19	奈良教育大 研究発表会
1994. 5. 7	京都教育大 総会 講演 1. 星野一正「生命倫理の観点 からのちを考える」 2. 岡本祐三「医療と福祉の新 時代」	1997. 5. 10	滋賀県立大 総会 講演 1. 末石富太郎「環境・健康・ 観光とコミュニケーション」 2. 堀越昌子「近江の食文化— 淡水魚ナレズシ文化の発展 を中心として—」
1994. 10. 15	大阪教育大 研究発表会 フォーラム「家政学将来構想」	1997. 10. 25	園田学園女子大短大部 研究発表会 役員会（支部長選挙）
1995. 5. 20・21	奈良女子大 日本家政学会第 47 回大会		

中国・四国支部

中国・四国支部長 田 村 咲 江

1. はじめに

(社)日本家政学会の創立 50 周年を迎えるにあたり、心からのお慶びを申し上げる。戦後間もなくに新しい分野の学会として設立された家政学会を、ここまで立派に発展させられた先輩の先生方の並々ならぬご尽力に深く感謝申し上げるとともに、次の半世紀が始まる 21 世紀に向けて家政学の真価を伝え、一層発展させる責務を感じている。

中国・四国支部は昭和 29 年に設立総会が開かれて以来、今年は 45 年目を迎える。その間の支部の歴史については、支部設立 20 周年の記念誌「20 年のあゆみ」（昭和 48 年）、支部設立 30 周年の記念誌「30 周年記念誌—この 10 年のあゆみ—」（昭和 59 年 5 月）、支部創立 40 周年の記念誌「40 周年記念誌—この 10 年のあゆみ—」（平成 6 年 3 月）にまとめられており、学会長の祝辞と支部長・顧問（元支部長）の挨拶に当時の様子が詳しく述べられている。今これらを読ませていただくと、各時期の支部長の卓越した識見と役員、

会員の支部長に寄せられる信頼と支持の大きさに強く打たれるものがある。

このような学会運営のご努力の中で、筆者は昭和 37 年の第 9 回大会から参加して研究発表をさせていただいて以来、今日まで中国・四国支部のみに所属してご指導を受け、お育ていただいたものである。このたび本稿の執筆を依頼されることになり、あらためて支部の歴史に想いをはせて、先輩の諸先生に深く感謝申し上げます。

本稿は、学会創立 40 周年のときに記された支部活動の回顧と展望に続くその後の 10 年のあゆみについて記載する。

2. 支部会員数の推移

支部の正会員数、学生会員数、並びに学校幹事数を表 1 に示す。この 10 年間を通して年度末の正会員数は 530 名前後で、増減は少ない。3 名以上の会員を有する機関（大学）から選出される学校幹事数もほとんど変わっていない。学生会員は少ないながらも 10 年